

2025年度 博士前期課程入学者選抜（I期）学力検査

課題文 外国語（日本語）

【課題文 I】（日本語）

著作権の関係上、掲載していません。

著作権の関係上、掲載していません。

『認知バイアス 心に潜むふしぎな働き』鈴木宏昭（講談社）

【課題文Ⅱ】（日本語）

著作権の関係上、掲載していません。

著作権の関係上、掲載していません。

『日本語教育の過去・現在・未来 第1巻「社会」』第3部・7 伊東祐郎（凡人社）

注1 言語能力記述文とは、当該言語の使用者や学習者が日常生活や就労、就学などの場面で直面する課題を達成するために必要な言語能力の水準を具体的に示したものである。これらの多くは具体的な「できること」について、「～できる」という形で表現された記述文である。

注2 CEFR は、Common European Framework of Reference for Languages の略で、日本語ではヨーロッパ言語共通参照枠と訳されている。

2025年度 博士前期課程入学者選抜(Ⅰ期)
学 力 検 査

外国語(日 本 語)

問題Ⅰ 別紙の課題文Ⅰを読んで、以下の問1～問10に答えなさい。

問1 空欄 に入る表現として最も適当なものを以下の①～④から一つ選び、() に○をつけなさい。

- () ① しみじみ
- () ② もろもろ
- () ③ かれこれ
- () ④ あれこれ

問2

著作権の関係上、掲載していません。

問3

著作権の関係上、掲載していません。

問4 下線部(c)の「仰天する」と最も意味が近い表現を以下の①～④から一つ選び、() に○をつけなさい。

- () ① おどろく
- () ② 上を見る
- () ③ がっかりする
- () ④ 転倒する

問5 空欄部 に入る表現として最も適当なものを以下の①～④から一つ選び、
() に○をつけなさい。

- () ① 密かに
- () ② 悠然と
- () ③ こっそり
- () ④ 迅速に

問6 空欄部 に入る表現として最も適当なものを以下の①～④から一つ選び、
() に○をつけなさい。

- () ① 巧妙な
- () ② 劇的な
- () ③ さりげない
- () ④ ありがちな

問7

著作権の関係上、掲載していません。

問8

著作権の関係上、掲載していません。

問9

著作権の関係上、掲載していません。

問10

著作権の関係上、掲載していません。

問題Ⅱ 別紙の課題文Ⅱを読んで、以下の問1～問4に答えなさい。

問1

著作権の関係上、掲載していません。

問2

著作権の関係上、掲載していません。

問3

著作権の関係上、掲載していません。

2025年度 博士前期課程入学者選抜（I期） 学力検査
外国語（日本語）

《解答・解答例》

論述問題は評価のポイントを示す。

問題 I（読解問題）

問1 ④

問2 ②

問3 ③

問4 ①

問5 ②

問6 ③

問7 ③

問8 評価のポイント

1. 本文内容に基づき、注意資源には限界があるという概念を理解し、ある対象に注意を集中すると他の情報に注意を向けにくくなることを説明していること。
2. その結果、視野に入っている対象であっても変化や対象を認識できないことがあることを説明していること。
3. 以上を踏まえ、チェンジ・ブラインドネスの原理として、人は同時に多くの情報を処理できないという認知過程を適切に説明していること。

問9 評価のポイント

1. 「節穴」という比喻表現が、見えていても気づかないことを意味していることを本文の文脈に即して説明していること。
2. 人は目に入ったものすべてを正確に認識しているわけではなく、注意を向けていないものには気づかないことがあるという視覚の特性を説明していること。
3. 実験結果を踏まえ、多くの人が変化に気づかなかったことから、人間の視覚には限界があり見えているものでも認識されない場合があることを説明していること。

問10 ③

問題Ⅱ（日本語教育に関する読解・論述）

問1 評価のポイント

1. 言語能力を文法知識などの知識としてではなく、学習者が実際に「何ができるか」という言語行動（Can-Do）として捉える考え方を説明していること。
2. 言語能力が段階的なレベルで記述されるものであり、学習者がどのようなコミュニケーション活動をどのような場面で行えるかという形で示されることに言及していること。
3. CEFR などの現代の言語教育スタンダードにおける能力記述型の考え方を踏まえ、言語能力を行為能力として説明していること。

問2 評価のポイント

1. コミュニカティブ能力を文法能力・社会言語能力・談話能力・方略能力などに分類するモデルであることを説明していること。
2. そのモデルが実際の言語使用を十分に説明できない点や、概念が抽象的で評価・測定が難しいという問題点に言及していること。
3. そのため、言語能力を具体的な言語行動として記述する枠組み（Can-Do 型の能力記述）が求められたことを説明していること。

問3 評価のポイント

1. 概念（時間・空間・量・頻度などの意味概念）と機能（依頼・提案・謝罪・情報提供などのコミュニケーション目的）という観点から言語内容を整理するシラバスであることを説明していること。
2. 文法構造ではなく意味やコミュニケーション機能を中心に言語項目を組織するという特徴に言及していること。
3. 実際のコミュニケーション場面や学習者の言語行動を基盤として言語教育内容を構成する考え方であることを説明していること。

問4 評価のポイント

1. 言語能力記述文が生まれた背景（従来の能力観の限界や、言語能力を行為として捉える必要性など）について、本文に基づいて適切に説明していること。
2. Can-Do 型の能力記述の意義や特徴について理解し、日本語教育における評価や指導との関連に言及していること。
3. 上記を踏まえ、自らの意見を具体的かつ論理的に述べ、全体として一貫した論述になっていること。

《出題の意図》

問題Ⅰ（読解問題）

与えられた文章の内容を正確に理解する力を確認し、語彙や表現の意味、文脈に基づく内容理解を測る。また、本文の内容を踏まえて要点を説明する力や、日本語で簡潔に説明する表現力を評価する。

問題Ⅱ（日本語教育に関する読解・論述）

言語能力や言語教育に関する基礎的概念について、本文の内容を理解したうえで説明できるか、日本語教育に関する知識を踏まえて自分の考えを論理的に述べることができるかを評価する。